

土佐琳派：2015年の琳派400年に、 現代の琳派の句読点を打つ

トサ ナオコ
土佐 尚子

文化をコンピューティングするというタームは、マサチューセッツ工科大学の建築学部の下にあるCenter for Advanced Visual Studiesというところで、Artist Fellowとして三年間在籍していた際に考えたことです。今はプロフェッショナルなアーティストとしての仕事をしながら、京都大学でアートを教えています。専門としては工学博士で、アートを今最先端の技術で表現しようと思いましたが、そのためにコンピューターサイエンスを学びました。

アートというのは、人間を表現することです。何かしらの形で人間を表現し、今までなかったような美しさを発見して、それを表現していくものだと考えています。

アメリカのボストンに三年間いた時に、初めて日本人とはなにかとか、日本人の文化だとか、日本人の特性だとか、そういったものを顧みるようになりました。味覚にしろ、好みにしろ、言語にしろ、そういった文化というのは服を脱ぐように取り替えられない。自分たちの遺伝子レベルで染みついているような様々な日本人の文化を表現していくことは、日本人アーティストとして非常にまっとうなことではないかと思ったわけです。そこで、文化のコンピューティングというタームで、日本の文化の特性を何らかの形でやっていこうと考えました。

こういった文化の特性と、コンピューターというのは水と油のようなところがありますが、「物を考えたり作ったりするときは、遠いものと遠いものを結

びつけると新しいものが見つかる」というのが私のコンセプトです。遠いものをどうやって結びつけるかによって、そこに新しい発見が生まれます。こうした観点から、専門としているコンピューターと芸術から、対象を文化の方面にも少し広げています。例えば、ものの哀れですとか、移ろいやすい風土からくるわびさびのようなもの、それから日本文化とアジアの関係、神仏習合にみられるようなもの、和歌や俳句、そして意匠などを扱っています。

尾形光琳に代表される琳派という絵画の流派が安土桃山時代からありますが、来年が400周年記念の年です。どこから考えて400周年かといえますと、本阿弥光悦という人が光悦村というものを京都に作りましたが、そこから400周年の年になります。光悦村というのは、今で言うところの産官学連携の考え方によって、京都の町を活性化していたものです。琳派の代表的な作品に、風神雷神というものがあります。大胆な構図とパターンがあって、垂らし込みという技法がよく用いられています。海外にもジャポニズムと呼ばれる形で影響を与えていまして、例えばグスタフクリムトというオーストリアの画家がいます。グスタフクリムトは、貴婦人の背景によく金箔を使っています。

この琳派400周年記念事業は、京都府の記念事業として京都国立博物館の新館旧館で行います。メディアアートなので、現代の琳派や未来の琳派などと言いたかったのですが、私一人がそういうことをやっているわけではないので、「土佐琳派」というふうに、私の名前を付けさせていただきました。

ところで、芸術とはなんでしょう。文学も芸術の一つだと思いますが、私が一人のアーティストとして考えるのは、芸術とは自分を通した現代の記憶であるということです。この記憶が大量に積み重なって、一つの歴史になっていくということです。

では、メディアアートのメディアとはなにを指すのか。例えば、文学も一つの言葉のメディアです。すなわち言葉で表現するメディアと考えられます。私は視覚を扱うアーティストなので、言葉を視覚で表現する方法を考えます。例えば、京都の禅寺の建仁寺には樹齢200年の老木があり、すごく静かな雰囲気

を生み出しています。でもその写真を見るだけでは、静けさはあまり伝わりません。言葉でこうやって説明しないと伝わらない。ではどうやって表現したかというと、老木一本だけにしてしまう（図1）。最低限のものにしてしまう。これは視覚的な表現です。静けさだけを視覚で伝える。こういうものが文章の表現とは違う表現の方法だと思います。

一方、様々な自然科学の中には、美というものが含まれています。レオナルド・ダ・ヴィンチの時代、アーティストという名前が世の中に現れた時代から、我々は自然界の中の美しさを模倣してきました。例えば、巻貝の美しさ、川の流れ、花びらの形状、土の干からびた割れ目、雪の結晶、シダの葉っぱ、などです。これら自然界の中にある形状には、何かしらのルールが存在します。このルールをコンピューターの中で再現することもできます。先人は、こういう視覚的なものからルールを導き出してきました。

私たちがやろうとしているのは、メディアを変換するということです。ということかということ、音声メディアから映像を生成するとか、映像を音のメディアに変換する。これ（図2）は私が20代の頃にやった仕事なのですが、1985年に作った作品です。映像の輝度つまり明るさから、音声をリアルタイムに作り出すというビデオアートを作りました。パソコンもなかった時代にアナログで作ったものです。光センサーをモニターの前に付け、簡単なオームの法則程度のものを載せています。例えば、画面が明るくなってくると音がだんだん高くなって、画面が暗くなってくると音が低くなってくる、というルールを与えました。

最近では音の振動で作った生け花を作っています。Sound of Ikebana（図3）と名付けたものです。この仕組みですが、スピーカーの上にゴムを貼って、その上にいろいろな液体を置きます。スピーカーから音が出ると、その音の振動で上に置いた液体が飛び上がります。その状況をハイスピードカメラで2000分の1、つまり2000倍に時間を引き延ばして撮影するのです。この美しい形は、私たちの裸眼では見えない形、ハイスピードカメラの機械を通してしか見

られない美しい形です。生け花という日本の伝統的なものと、先端技術を組み合わせただけです。しかもこれはコンピューターでシミュレーションされたものではなく、物理的なもの、絵の具やオイル、顔料などで作られています。液体の粘性だとか、音の振動の組み合わせで様々な生け花を作ることが出来ます。これは一つのデザインと言ってもいい。液体という形の無いものから、振動で形を与える。音というメディアから、視覚的な形状を生み出しているわけです。しかもそれは我々の見えないレベルの映像です。この現代的な手法で新しい琳派を作り上げようと試んでいます。

生け花とは何かについても、お話ししておきたいと思います。生け花には色々な流派がありますが、フラジャイルな三角形を描くというのが重要です。安定してはいけません。

去年の秋、シンガポールのカジノリゾートであるMarina bay sandsが所有しているArtScience Museumという、白い蓮の花を模したような建物がありますが、そこの企画展としてSound of Ikebanaを3ヶ月間展示しました。シンガポールには四季がありません。そこで、なんとか日本の四季を今の技法で表現したいと思ったわけです。その時なにを使ったかと言いますと、俳句を使いました。松尾芭蕉、与謝野蕪村、小林一茶の俳句を使って、四季それぞれのSound of Ikebanaに組み合わせました。このSound of Ikebanaをプロジェクションマッピングにする機会がありました。今年の一月に経産省のクールジャパンの助成金がつき、実施することができました。これから映像でお見せしたいと思います。

(動画上映開始)

例えば春から紹介しますが、これは端的なお正月の色。Sound of Ikebanaだとかこういう感じですね。それで俳句はこう。で、梅の季節。これは夜の梅ですが、Sound of Ikebanaと俳句はこんな感じ。それから春というとパステルカラーですから、キャンディの色からこういったSound of Ikebanaを作りました。他に春の色というと、平安時代の襲の色目とかありまして、そういったものも取り入れてみました。夏は杜若。先ほどお見せしたのと違うバージョンです。

次はプロジェクションマッピングで【冬】をお見せしたいと思います（図4）。ArtScience Museumはすごく巨大です。このとき俳句はどこに行ったかという、ARといって、モバイルフォン（スマートフォン）をかざすと俳句が見えるという仕組みを作りました。音楽は、近藤等則さんというジャズトランペッターの方とコラボレーションしています。

今、シンガポールのギャラリーでスペースフラワーという新作を見せていますが、これはまた違う技法で作成しています。液体窒素を使ったもので、これはスペースジャングルという作品です（図5）。ハイスピードカメラを使って撮影しています。花を液体窒素に入れてマイナス200度にしました。人間というのは、壊れる美しさに本能的な関心があると思うのです。壊れる前の美しさ、壊れるときの美しさ、そういう創造的な破壊をテーマにしています。

あともう一点、今展覧会をしている作品の中から、風神雷神をテーマにしているものがあるので、その風神の方をお見せします。これは風の神がやってきて、祭りのようなものがあって、去って行くというストーリーです。

最後に、今作っている仕事の作品をお見せして終わりたいと思います。今はオーガニックジオメトリーということを考えています。これは、液体や泡など形状の無いものに対して規則を与える、というものです。ジオメトリーというのは、幾何学的なものを与えるという意味です。やはり琳派をテーマにしています。今までのオーガニックなデザインとしては、フラクタルとかカオスというものがありましたが、これらは形が固定しています。オーガニックジオメトリーでは、形が固定していないものを幾何学的な形にし、そこから新しい形を取り出していく。そうすることで、様々なもののデザインが変わります。小さな造形物や大きな建築物などのデザインを変えることが出来るわけです。

（動画上映終了）

以上で終わりたいと思います。ご静聴どうもありがとうございました。

A black and white photograph of a traditional East Asian building with a tiled roof and a gnarled tree in the foreground. The building's roof is covered in dark, overlapping tiles, and its eaves curve upwards. A small, dark, ornate finial is visible on the right side of the roof. In the foreground, a large, gnarled tree with dense foliage stands on a paved surface. The ground is composed of large, rectangular stone tiles. The overall composition is minimalist and evokes a sense of quietude and tradition.

Title: Sanctuary 4 " Silence "
Year: 2012 / Medium: Photography / Size: W 1030 x H 728(mm)

[HOME](#)
[EXPLORE](#)
[THE COLLECTION](#)

[Log In](#)
[A-Z](#)
[Browse](#)

8,965 Artists and 28,146 Works

[Who's In](#)
[Depth: All](#)
[Decade: All](#)

[ADVANCED SEARCH](#)

[THUMBNAILS](#)
[SLIDESHOW](#)
[LIST](#)
[SMALL GRID](#)

SEARCH RESULTS
SHOWING 1 OF 1

NOT ON VIEW

An Expression
Artist: Tsuji (Japanese, born 1961)

1985. Video (color, sound), 9 min. Purchase. © 2011 Neale Tait Ltd. 1986

Related Links

- Who's In: Tsuji, Tsuji (?)
- Department: Media and Performance Art (1985)
- Classification: Video (1234)
- Date: 1985
- Provenance: Gagosian Gallery, Miami
- Permissions: Create a permanent URL for this work

[Find related products at MoMA Store](#)

IMAGE PERMISSIONS

NAOKO TOSA Video Art
Title: An Expression, / Year:1985
Medium: Video (color) , sound, 8min.
Music by Tatsuo Kondo

顔の表情の映像が音に変換される作品

まだパソコンが登場していない1980年代に、モニターの前に光センサーを付け、アナログシンセサイザーで映像の音を生成。映像の明る度高いと音が低く、明るが低いと高い音を生成する

This is a work that measures the brightness of an image from a photodetector and generates music from that brightness while sampling various facial expressions automatically.

【图3】



【图4】



【图5】

